
魔法少女リリカルなのは～神の化身～

サンライト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは～神の化身～

【Zコード】

N7466R

【作者名】

サンライト

【あらすじ】

あるところに通りすがつた少年と、命を救われた少女。一人が再び出会うとき物語が動き出す。

* この作品は、いろいろなアニメの一話（人物像や技、セリフなど）を使用しています。苦手な方は、ご遠慮ください。

プロローグ「書の世界で」（前書き）

初投稿の作品です。
駄文ですが、ご了承ください。

プロローグ「雪の世界で」

「は、とある白き世界。そんな中に一人の少年がいた。

「ふう。こんなものか。」

少年の持っていた袋の中は、色とりどりに輝く鉱石が入っていた。

「んにしても、さつきから何の音だ?」

そう、少年がいるところから近いところで、何か爆発音がするのだ、

・・・が、彼はといふと、

「・・・せつかくだし、行ってみるか。」

と、いう始末である。

そういうと彼は、その場から消えた。

seidなのは

今日は、ヴィータちゃんと部隊の人たちで、ある世界での任務についています。

「特に何も無く終わつたな。」

そういうのは、少し離れたところにいたヴィータちゃんだった。確かに、何も無かつたけれどそんなに暇そつと閒つのはね～・・・。
と、思ったとき、

「未確認物体（アンノウン）を発見、攻撃の意思があるみひですー...」
そう言われて、隊員さんの方を向くと、まるで蜘蛛のようなロボットが、こちらに攻撃を仕掛けてきた。

「いぐぞーー！なのは！」

「うん！」

そう、ヴィータちゃんに返事をして、私たち、アンノウンの撃退を始めた。

（数分後）

私たちは、アンノウンを撃退して、ヴィータちゃんは通信をするために、隊員さん達と一緒にいます。私は、少し離れたところで休んでます。

「ふうー。なんか疲れたなあー」

何故か最近、私は疲れやすくなつていたような気がしました。

・・・それがきのせいでは無いことなど、このときの私が知る由もなかつたのです。

ドツッ。

その時までは・・・。

side ヴィータ

あたいは、本部に連絡するため少しなのはから離れた。
後で、それを死ぬほど後悔するとは、思わなかつた。

ドツツ

その音がするまで。

side out

ドツツ。

その音がした瞬間、その場にいた者が見たものは、

「う・・・」

苦しげな声をあげるのはと、

「ぐひゅ・・・」

なのはを突き刺した、先ほどのアンノウンだった。

「・・・っ！なのは！！！」

いち早く理解したヴィータがなのはを助けに向かうが、行く手にほかのアンノウンが現れた。

まるで、邪魔をするかのように。

「ちつ！どけえ――――！」

ほかの隊員も援護するが、なかなかなのはのもとに行けない。きずくと、なのはは地面に転がりアンノウンがとどめを刺そうとした。

「なのは・・・・やめろ――――！」

ヴィータが叫ぶ中、武器の付いた腕が振り下ろされた。

ガキイイイン。

はずだつた。

「なんか知らんが、間に合つたようだな。」

謎の少年が、攻撃をとめていた。

s i d e o u t

謎の少年は少女なのはの前に立ち、真っ赤な龍の形をした大剣を使ってアンノウンの攻撃を防いでた。そして、止めながら少年は少女に尋ねた。

「おーい。生きてるか？」

・・・・・ とてもこんな状況で話すセリフではない。

「だ・・・ いじょうぶ。」

・・・・・ なのはもなのはである。誰が見ても、大丈夫ではない。

「そりか・・・ んじや。」

と、いうと少年は軽く剣をふるい、アンノウンを切り飛ばした。そして、こう言った。

「・・・ ここの指とくまれ。」

・・・・と、いうと向こう側で戦っていたヴィータがそこにいた。

「つー・・・ て、なのは?!」

驚きつつも、なのはに駆け寄るヴィータ。それを見た少年は、なのはをまかせてアンノウンに向き直った。

「モード・ツバイ。」

『モードツー。バズーカモード。』

すると、龍の口の部分から出ていた刃が引っ込み砲身が現れた。

『ロードカートリッジ。』

ガシュン、と音をたてて薬莢が排出される。

「散弾モードで装填。」

『了解、散弾装填。発射準備完了。』

「・・・ 発射ああ！！！」

すると一つの魔力弾が発射され、途中でばらばらに飛び散りアンノウンをすべて破壊した。

プロローグ「雪の世界で」（後書き）

次回・「約束と別れ」

第一話「約束と別れ」（前書き）

第一話です！

第一話「約束と別れ」

目が覚めると「」はベッドの上だった。

「・・・っ！」

起き上がるうつとすると、ものすごい激痛を感じる。なのでずっと天井を見ていると。

「「なのは（ちやん）」」

と、言いながら二人の女の子が入ってきた。その一人は、「・・・フェイトちゃん、はやてちやん。」

私の大事な友達、フェイト・テスター・ハラオウン」とフェイとちやんと、八神はやてことははやてちやん。
・・・そつか、私落ちたんだっけ。

「なのは、大丈夫？」

「・・・いや、大丈夫やないと思ひナビ、具合はいいや？」

「大丈夫だよ、・・・たぶん。」

「今、たぶん言つたやろたぶんて！…！」

うう～、でも体はまだ痛いけど、変な感じもしないし・・・。

「・・・まあ、元気そうによかつたよ。」

「ほんまや～、相変わらずなのはちやんの頑丈さにはあきれるわ～。」

「？」

何のことかと思い聞いてみると驚いた。

なんでも胸を一突きされたはずなのに、病院についたときにはほぼ完ぺきな措置がされていたそうだ。

ほかの局員曰く。

「「「あいつだ。」」」

とか、その人については二人とも聞いていなかつたようだ。すると、

「目元覚めたつてホントか？！なのは…
ヴィータちゃんが入つてきた。

その後、ヴィータちゃんを落ち着かせと後、その時のことを見た。それによれば、意識を失う前に見たあの大剣の持ち主が助けてくれて、その後に何か見慣れない魔法を私にかけると、その場を去つたらしい。ヴィータちゃん達も追いかけたが途中で見失つたとか。
・・・とても残念です。

30分ほど話した後、三人は帰りました。

「・・・」

そしてまたぼーっとしてると、何か視線を感じ私がそちらを向くと、
「・・・調子はどうだ？」

赤いフードつきのマントをかぶつた、一人の少年がいました。しかし、私はそれよりもその少年が持つていてる物に目が行きました。

「・・・もしかして、あの時の？」

「・・・ああ、そうだ。」

そう、彼はあの赤い龍の大剣を背負つていたのだ。

「あ、あの、お礼が言いたかつたんだ。・・・あの時助けてくれて
ありがとう。」

「いや、いいさ。俺も関係ないからと言つて死にそうなやつを見過
ごすほどの残酷な人間じやないし。」

「うん。・・・それでも、ありがと。」

「・・・んじゃ、どういたしまして、でいいのかな?」

うん!

私がそう言うと、その人は少し微笑んだ。

その笑顔は又剛だよ。

「？大丈夫か？」

さすがに、昆とれてたなんて。.. / / / / /

「んじゃ、いくか。」

えつ?

そしてその人は、窓の方へと歩いていく

四庫全書

「名前、・・・名前はなんていうの?私はなのは、高町なのはつ

ていうの。

シナリオ

「ジヤンゴ」

「ジヤハラヘ」

「ああ、ジャンゴ・フヨーネクス、変な名前だろ？」

「碁がは変わつてゐるけどいい名前だと思ひよ」

「アラビア語の書類」

「・・・いや、初めてそう言われたから・・・。

そうつぶやくと、窓の方を回り、私に向かって話した。

「うん、ジャンゴ君も。また二つか会おうね。」

「ああ、約束だ。」

そつと、彼は窓から飛んで行った。

第一話「約束と別れ」（後書き）

次回「機動六課」

第一話「機動六課」（前書き）

今回からあとがきトークがあります。

では、どうぞ！

第一話「機動六課」

s.i.d.e はやて

・・・ん?

ああ！ ここにちは、機動六課部隊長ハ神はやてです。機動六課も動き始めて一週間、うちの部隊のフォワードもなのはちやんのおかげで先のリニアレールでのロストロガア「レリック」確保もでき、とても順調です。

んで今、私は何をしてるかといつと・・・。

「・・・ん~。」

「どうしたんですか？ はやてちゃん？」

今話しかけてきたのは私のユニゾンデバイス、リインフォース・ツバイ小さいけど私の優秀な副官でもあるんよ~。

「いやーなりイン、この部隊の隊舎の端に艦の停留場があるやん？」「はい。それがどうしたんです？」

「ん~、そこなんよな~・・・。

「リインも聞いたことはあるやう、 時空管理局協力軍隊・アルバーデ って部隊。」

「はいはい！ なんでもすげく強くて魔力のない人でも戦えるような装備と技術を兼ね備えた部隊ですよね！」

といって、空中でピヨンと跳ねるリイン。・・・なじむなあ~。

「そや。で、そのアルバーデ隊が物資の補給とかでここを使わせてほしつて言つてきたんや。」

「すじいぢやないです！ あれ？ そういえば、その部隊の本部もミッドにあるんですね？」

「うん。でもなんか工事中らしくてな~、うちの部隊に出向といつ形で行かせてもらえるかやつて。」

なんともまあ、・・・でもこっちとしてはラッキーやけどな。

「ということで、明後日には来るらしいからな、挨拶に来るらしいから隊長たちにもいっといてな。」

「わかりました～！」

・・・さて、どんな人たちやろ。・・・嫌な人でないことだけ願つ
とい。

s i d e ? ? ?

ここが、機動六課ですか～。

海も近いですし、いいところですね～。

・・・えつ！ ? ? ? ジヤよくわからない？

えつと・・・それじゃあ、こここの部隊長との挨拶の時に一緒にしますので。

s i d e o u t

そして、ここは六課部隊長室、ここにいるのは、

「悪いな、急に呼び出して。」

この部屋の主、八神はやてと、

「ううん、ちょうど訓練も終わつたところだつたし。」

「私もはやてに報告書持つていいくとこだつたから。」

機動六課スタートーズ分隊隊長高町なのは一等空尉と、ライトニング分隊隊長フェイト・T・ハラオウン執務官である。

そう、今はやてが呼び出したのである。

「それで、その人は？」

「ううん・・・、もうすぐやと思つんやけど。」

フェイトの問いに答えるはやて。そるとそこに、カウンターから連絡が入り、その人物が到着したと伝えた。

「・・・ほな、二人ともええか？」

「・・・（コクリ）・・・」

さすがのこの二人も、相手が相手なので緊張しているようだ。

ピー

と、扉のブザーが鳴つた。

「失礼します。」

そして、一人の女性が入ってきた。

「時空管理局協力軍隊アルバード大将艦ブルーインパルス所属、魔導師部隊隊長佐伯真央少将です。」

・・・何とも長い自己紹介だ。

「時空管理局地上部隊機動六課部隊長八神はやて一等陸佐です。このたびは協力感謝します。」

「機動六課スターズ分隊隊長高町なのは一等空尉です。」

「同じく六課ライトニング分隊隊長フュイト・T・ハラオウン執務官です。」

・・・「ちらもなかなか負けない長さだ。特にフュイトは名前が長い。

グッサー！！

「（どうしたの、フュイトちゃん？）」

「（・・・何か分からぬけど、誰かにすりへ気がしてゐ」と言われた氣が・・・。」

「？？？」

そんなんで落ち込んでるフュイトを見て、どうしたのか？と思つ真央だった。

side なのは

「それでは、これでお願いします。」

「了解や。」ちらもよろしくな。」

あれから数分話すと、真央さんはとてもいい人でした。しかも同い年だったので普通でいいといわれました。・・・ただ真央さんは、何か口癖なんか人のことを「さん」づけで読んでしまうらしいです。

あつ、そうだ。

「あの、真央さん。」

「はい。なにですか？」

「よかつたら、訓練見ていきませんか？」

もしかしたらいいアドバイスをもらえるかもしれないし。

「そうですね・・・とくに用事もないですし、ぜひお願ひします。」

よし！んじゃさっそく

「それじゃ、こちらです。」

side out

「こんにちは、ティアナ・ランスターです。

えつと私たちは今、午後の訓練のため訓練場の仮想シミュレーターでじゅんびうんどうをしています。

「つて、サボつてないでアップしなさいスバル！」

「うん、そただけど遅いねーなのはさん達。」

「確かにそうですね。」

「そういうえば、ハ神部隊長のところに行くとか言っていたよつな・。」

えつと、上から訓練校からの腐れ縁のスバル・ナカジマ二等陸士、チッビ子のエリオ・モンテイアル二等陸士とキヤロ・ル・ルシエ二等陸士ね。

「部隊長のところへいつ」とは何かあつたのかしら。」

「そんなことを言つていると、

「みんなー、待たせてごめんねー。」

なのはさんがやつてきた、・・・誰かを連れて。

「いいえ、それよりもそちらの方は？」

「あつ、紹介するね。」

そういふと、その女性が一步前に出て、

「明後日から『ひばり』に出向する」とになりました。・・・（以下省略）

「・・・」

・・・誰からも声が出ない、って当たり前でしょ……あの『アールバード』つていつたら誰でもびっくりするわよ……
・・・そんなに驚かなくてもいいじゃないですか～・・・
「すっ、すみません。」

なんかなのはさんが「あちやー、先に言つておけばよかつた。」とか言つてるけど、もう遅いですよ。

「・・・えー、あとあまり気にしなかったことにするので、気軽に話しかけてください。」

「 」・・・はい。」「

気にしなかつたことこれできるか?...とも思つたけど、シッコまないこ

とこした。

「それじゃ、午後の訓練始めるよーー。」「

「 」はいーー。」「

side out

第一話「機動六課」（後書き）

作「と、いうことであとがきトークタイム！」
ジヤ「よひやくだな。」

作「まあね、まずはどうしよ？」

ジヤ「おい！計画性ないのかよ！」

作「・・・すみません。」

ジヤ「そういうえば、初めのときにネタを入れたな。」

作「何だっけ？」

ジヤ「打つ時の『・・・発射あああ！－！』だよ！」

作「おお！忘れてた！たしか、ガンダムのガロードか？」

ジヤ「書き始めてまだ五日目なのに大丈夫か？」

作「大丈夫だ！問題ない！」

ジヤ「問題だああ！！！」

作「さてこんな感じで進んでいくのでよろしく！」

ジヤ「・・・次回『訓練と弾幕』って、これなに？！」

第二回「講義と研究」（論著卷）

第三回です！

それでは、どうぞ。

第三話「訓練と弾幕」

side 真央

ただいま六課の訓練を見せてもらつてゐるのですが・・・。

「はああ！」

・・・あんなにまつすぐ突つ込んでら

「あ～れ～？！」

・・・やつぱり流された。

「クロスファイヤー、シユートー！」

なかなかコントロールはいいけど・・・、

「アクセルシユーター！」

『アクセルシユーター』

「シユートー！」

「なつ！」

・・・まだ数が足りないですね～。

「でえりいやあ～！」

この子は、

「ふん！」

ガキイン！

「うわあ～！」

もう少し、筋力をつけたほうがよさそうですね・・・。

「えつ、えつと～・・・。」

この子はもう少しか攻撃手段があつたほうがよさそうな・・・。

と、いう感じです。

「それじゃ、ここまで！」

あっ、終わったようですね。

「皆さんお疲れ様。」

「「「あ、あり・・がとうござります・・・。」」」

なんか、可哀想に思つたのはなぜでしょう？

「あの、よかつたらこの子たちにアドバイスはありますか？」

「・・・そうですね。」

side out

side スバル

今日の訓練はあのアルバードの人々が来ていて少し緊張したけど、優しそうな人でよかったです。

それで今アドバイスを受けるのですけど、どういふのが楽しみ！

「まず、スバル。」

「つーはー！」

いきなり私だあー！

「スバルは攻撃力は申し分ないのですけど・・・」
と、そう言って私のほうを申し訳なさそうに見てきました。って、
な」「?!

二〇

L

その場にへたり込んでしまった。

-
あ

1

「ホントですか！！！」「…・・はい。」

side out

どうにかスバルは立ち直ったようね。にしてもなかなかの辛口コメンティターのようね、私も覺悟しなきや、・・・凡人だし。

「次はティアナ。」

「来た！」

「はい。」

「ティアナは弾丸の形成やコントロールがうまいから、後は一回に操作及び形成できる球の個数を増やすことですね。」

「・・・えつ？！」

「たつたこれだけ？！」

「あつ、そうだ！よかつたら、今度ティアナに何か教えてもいいですか？」

「ん？いいですよ？」

「ちょっとちょっと、ちょっととー？！」

「いいなあ、ティアだけ。」

「いやいや、そんな軽く言つてる場合？！」

「い、いいんですか？！」

「はい！！鍛えがいがありそうですしだ！」

即トー！・・・でも得したかも。こんなすごい人に認めてもらえたのだし。

side out

side ヒリオ

やつぱりティアさんてすごいですね。あの人に認められた感じです
し。

「次、ヒリオ。」
「はい！」

どういわれるのかな・・・。

「ヒリオはまだ体の筋力がないので、筋力を上げるといいと思いま
す。でも、成長に支障をきたさない程度にね」

「はい！」

・・・よし、頑張ろ!つーー！

「あつ、あと。」

ん?

「よかつたら、槍術を教えましょーうか?」「
「えつ?!真央さん、槍を使うんですか!」
「はい、なのでどうかと。」
「お願ひします!ーー！」
やつたーー！」

side out

side キヤロ

みんなすごいなー・・・。

「そして、キヤロ。」

「は、はい！」

「キヤロはサポート系の魔法はよく出来てたけど、フルバックとしての攻撃魔法がなくて、よく何もできない場面があったから、そういうのを覚えるといいよ。」

「はい！」

そつか、頑ばろ

「あと・・・はいこれ。」

「???, 何ですかこれは?」

もらつたのは、エリオ君のストラーダみたいな腕時計でした。

「それは、『バトルチップローダー』っていうの」

「・・・?どう使うんですか?」

「えっとね~。」

そうして、その使い方を教えてもらいました。

side out

side なのは

何かをキャロが貰つたようだけど、なんだろ？

「なのはさん。」

「どうしました？」

「実はですね」。・・・

どうやらキャロが貰つたものを試したいとか。で、私がその相手。

「それじゃ、行くよキャロ。」

「はい！おねがいします。」

そうして始まった。

side out

なのはは空中でキャロの出方をつかがっていた。

「キャロ、先攻どうだ。」

なのはが先攻を譲った。

「では・・・」

そういうとキャロは腕時計に手を添えて、

「バトルオペレーション・セット」

『イン』

すると、時計のところからブレードのようなものが出てきた。
「サポート用バトルチップ『ゼロ・ウイング』スロットイン!」
ブレードの接続部から光が出てブレードの上に動いた。すると、

バサアア…

「うわあ・・・」

「きれい・・・」

「す、す、す、じ、い、・、・、」

キャロの背中に白き翼が生えた。

「(ほら、キャロ次)」

「(はい!)」

「攻撃用バトルチップ『バルカン』スロットイン!」

次は、きやろの右腕に回転式の銃器が現れた。

「レイジングハート」

『アクセルシューター』

なのはが、誘導弾の用意に入る。そして、

「「シユート！」」

二人とも一斉に撃ち始めた。なのははシールドで防ぎ、キヤロはバルカンで撃ち落とす。

しかし、このままだとキヤロの不利である。

「（つーそだ！）バトルチップ《エリアスチール》スロットイン！」

キヤロの移動速度が上がる。

「シユート！」

しかし、なのはがアクセルシューターを飛ばし、迎撃に乗り出す。だが、

「フリード！」

キヤロとなのはの間にフリードが出てくる。

「バトルチップ《サラマンダー》スロットイン！」

「きゅくー！」

炎を纏つたフリードが、なのはのアクセルシューターを弾き飛ばしながら突進していく。

しかし、なのはは落ち着いて、シールドを斜めに展開してフリードの突進をそらす。

「・・・？！キヤロは？」

見回すとキヤロがない。

「やーーー！」

と、その時キヤロがなのはの後ろから現れる、

「《インビジブル》解除！バトルチップ《ブレイクハンマー》スロットイン！」

石を削つたようなハンマーを持つて。

『ラウンシールド』

レイジングハートがシールドを張るが、

パリーン・・・。

「つ？…「つそ？…」

なのはのシールドはハンマーに触れた途端、粉々になりなのはは地面にたたきつけられた。

「うわ〜〜！！」

しかし、キャロもそのハンマーが重すぎたのか地面に落ちる。

「レイジングハート！」

『ロードカートリッジ！バスター』セット！』

「ディバイン！」

なのはは砲撃の準備をする、対してキャロは

「つ！（もう時間もないし…これしかない！）『ショットガ

ン』トリプルスロットイン！』

キャロの両腕と頭上に砲身が現れてキャロが両手を上にあげ三つを融合させる。

「プログラムアドバンス！『ハイパー』バースト』！』

「バスター！」

キャロなのはの砲撃がぶつかり、爆発した。

side フェイト

なんか、キャロがなのはとすこに勝負をして驚いている今日この頃

です・・・。

・・・あれ？ 私でもあんなに弾幕張れないよ？・・・それには
に近接戦で一発入れたし・・・。

・・・私、キヤロに負けてる？・・・なんか、目から水が・・・。

「・・・？ テスタークサ、どうした？」

・・・シグナム・・・。

「・・・なんかキヤロに負けた気がして・・・。」

「さすがにそれはない。」

「え？」

「確かに今の試合もルシエはなかなか良かったが、高町が手加減し
てるおかげだわ！」

「？？？」

「え？・・・どうこいつ、

「・・・はあ。おまえは気付かなかつたのか？ 高町がなぜあんなに
う（う）かなかつたとをもう？」

「・・・あ。様子を見るため？」

「ああ、あと少しのハンデだろうな。」

なるほど！・・・キヤロが心配で気付かなかつた・・・・・・。

すると、立ち上がっていた土煙が消えて一人の姿が見えた。

「いやあ～びつくりしたよ～。」

なのはは少しバリアジャケットが汚れていたけど、無傷だった。

「・・・あうあ～・・・」

キヤロはなぜかバインドで空中に固定されていた。

・・・ほんとに、おつかれさま。

第三話「訓練と闘志」（後書き）

（「これからは、作者は「作」と書くません。）

「あとがきへ

いやあ～あつとこつまだね～

ジヤ「なにが、「あつとこつ聞」だよ。」

「うわやーーまだまともに話してなこやつがー！

ジヤ「お前のせいだるーーー。」

やつともこりゃ。

ジヤ「でも、今日はネタいつぱいだな。」

ちなみに今回のは、

- ・ロックマンXグゼ
- ・遊戯王
- ・機動戦士ガンダムW

だな。

ジヤ「遊戯王とガンダム？」

遊戯王はバトルチップローダーの戦闘形態（遊戯王の、デュエルするときにつけるやつ）、ガンダムはゼロウイング（ウイングガンダムゼロカスタムのやつ）がそつだ。

ジャ「なるほどな。で、次回は？」

いよいよアルバードが六課に出向！

ジャ「あれ？ 真央は、どうしたんだ？」

あの後、普通に帰った。

ジャ「そうかよ。。。

あつ、感想まつてま～す。

第四話「アルバード軍」（前書き）

ついに、アルバード軍のとうじょう。

第四話「アルバード軍」

「」は、機動六課のロビーである。そして、そこには「」の六課の職員全員がそろっている。

なぜこうなつてるかといつと、

ヒソヒソ

「なあ、どんな人達だと思うか？」

「さあな、わからねえ。」

「怖かつたらどうしよ～。」

「・・・そしたら、辞表書くかも・・・・・・。」

「大丈夫だよ。・・・きっと。」

「時空管理局協力軍隊『アルバード』か～。」

そう、今日あの『アルバード』が、ここ機動六課に来るのだ。

そんな中、「」にも噂をする者がいた。

「（ねえ、ティア。）」

「（なに、スバル。）」

「（『アルバード』の人達ってさ、私たちと一緒に闘つたりするのかな？）」

「（・・・そういうえばそつね。）」

「（そういうえば・・・。）」

「（ん？なあに、キャロ？）」

「（フロイトさんが、そんなこと言つたよつな・・・。）」

「（どうなの？ちょっと楽しみ。）」

「（やうごえば、真央さんってアルバードの役職は何なんでしょう。）」

「（・・・聞いてないわね。）」

「（どうなんで・・・あつー来ましたよ。）」

すると、六課初田のように台の上に部隊長が立つた。

「えー、今日からこの機動六課に出向してもらいました、アルバードのみなさんです。」

すると、入口からそろそろと人が入ってきた。

「今ここにいるのは、おもに六課フォワードメンバーと一緒に出動してもらう人や、ここに顔を出す機会が多い人たちです。」

そして、はやてにかわり、一人の男性が台上に上がった。

「アルバード軍大将、ハルバードだ。まあ分かるだろうが、この軍の名前は俺の名から來てる。・・・と、それはいいか、これから世話になる、よろしくな。以上。」

拍手が起る。これにて終わりのようだ。

（数分後）

「真央さん！」

「ん？ あ、スバル。それにほかのみんなも、三日ぶりだね。」

フォワードメンバーが、真央に話しかけていた。しばらく話すと、エリオが、

「あ、そういうえば真央さんってアルバードでは、どんな役職なんですか？」

「あれ？ …… 言つてなかつたつけ。」

無言で頷く四人。

「…… そうだなー、戦闘では自分の隊の指揮をしたり、前線に立つこともありますね……。普段は、管理局からの依頼を受けたり、教導もしますよ？」

「魔導師ランクは、いくつなんですか？」

ティアナが聞く。

「私は、SSのコモッター付きです。」

• 7

「あ、ちなみに、艦長はEX（エクストラ）ですよ。」

—
•
•
•
—

ー・・・あの、みんな？」

フォワードの声が響き渡った。

(なに? ! この人!)

（ううだけでもすうじの元、せりにマジタードきて！）

これがここにいた四人と、偶然に聞いたほかのスタッフが思つた事であつた・・・。

「あ、皆いた、ちょっとフォワード集合。」

と、なのはが呼び掛けフォワードが集合、それに向かってハルバードとほか数人がいた。

「おつ、来たか。それじゃ、自己紹介だそうだ。」

「はい！」と、ヴィータの言葉に答える、

「えっと、機動六課所属スターズスリー、スバル・ナカジマです！」

「同じく機動六課所属ライターングスリー、エリオ・モントンスターです。」

「

「機動六課所属ライトニングスリー、エリオ・モントンリアルです。」

「機動六課所属ライターングスリー、エリオ・モントンリアルです。」

六課フォワードが言った後、金髪金眼の男性が出てきて

「・・・んじゃ、次はこちらか、アルバード軍大将兼、大将艦ブルーインパルス艦長ハルバードだ。・・・んでこっちは、」

すると、白い装甲をつけ、青い機械の羽をはやした、銀髪でアクアマリン色の瞳をもつた女性が前に出た。

「ブルーインパルス所属航空部隊隊長、アシェア・ブルカ・ファジヤール。気軽に『アシェア』って呼んでね！」

次に前に来たのは、またもや背中に羽をはやした三人

「航空部隊所属ウイングツー、イカロス・E・アルファードです。」

「同じくウイングスリー、ニンフ・E・ベータよ。」

「はーいー同じくウイングフォー、アストレア・E・デルターでーす！」

次に来るは、先日会った黒髪赤眼の女性と、黒髪黒眼で羽の生えた女性、

「ブルーインパルス所属魔導師部隊隊長、佐伯真央です。みんなよろしくね~。」

「魔導師部隊所属マジカルツー、風音日和です。」

次は、金髪にエメラルドグリーンの瞳の人

「ブルーインパルス所属陸戦部隊隊長、マリ・ブラット。よろしく

」

それに続くは、ピンク髪の女性、

「陸戦部隊所属ランツ・ディックツー、ララ・サタリン・デビルーグでーす。」

そうして少しづつお話をすると、じょじょと馴れたのかフォワード達の緊張も解けたようだ。

「あつ、そうだみんなで一回模擬戦しない?」

・・・ん?

「・・・そうだな、隊長人同士でやつてみるか。」

・・・んん?

「あの~、一体どうこう・・・。」

なのはが聞くと、

「いや、六課の隊長人の力量を見ようかということで、私たちアルバード隊長四名とそちらの機動六課隊長人四人で模擬戦をしようとすることです。まあ、親善試合とでもいいましょうか?」

「「「「・・・・え?」」」

第四話「アルバード軍」（後書き）

「本日のお知らせ」

作「あとがき」ナーノ模索中なので今日はありません。（礼）

ジヤ「次回「模擬戦？」いやいや嘘めでしょ？」

第五話「模擬戦?いやいや、嘘めでじょ?」（前書き）

久しぶりの投稿です！

なんかタイトルと違つたような内容になつてしまつたよつた・・・。

でわ、どう!

第五話「模擬戦?」いや、「や、虚むでしょ?」

・・・あ、血わきに元氣がなこのひかて?
え?なぜそんなに元氣がなこのひかて?

・・・・・・・回想といつね、・・・・・・・・。

（訓練場）

《六課側》

「・・・えつじだかる?」

「まあ、模擬戦をする」とこなつてしまつたのだからやるしかない
だろ?」

「んで、やるからは勝とうぜ！」

「……そうだね、まずは作戦でもたてようか？」

まずはアルバード側を見る。

「まずはあのマリという者は、ナカジマのようなナックルとローラが付いてるから、フロントアタッカーで間違いないな。」

「真央は何も持つてないから、フルバックか？」

「アシュアさんは重厚な装甲だし、ライフルも持つてるからセンターガードかな。」

「ハルバードさんは剣と銃を持っているから、ガードウイングだね。
・・でも、」

「一番強いだろうな。」

なのはが頷く。

「・・・それじゃ作戦だけど、」

六課の作戦は、いたつてシンプル。

まず、マリとアシュアを皆でいっせいに攻める、そのあとは、ハルバードをフェイントとなのはが、その隙にシグナム達が真央を倒しつとくものだった。

『アルバード側』

「…・れしそめ向いひまほす、マリを倒してみんなで来るな。

「え～。やだな～、ねえ真央～代りひまお～。

「はあ、仕方ないですな～。」

「…・あ、いっそり…・・・、」

『やがて、仕組んでゐるよつだ。』

「えーと、それではこれより、機動六課隊長陣・対・アルバード軍隊長陣の模擬戦をします。」

(こんな挨拶ありましたっけ?)

(アルバードではするみたいだよ。)

皆が戦闘態勢に入る中、六課側が驚く。

(・・・?—予想と違う!—)

アルバード側の陣形は、

『フロントアタックカー』：佐伯 真央
『センターガード』：マリ・ブラット
『ガードウェイング』：アシエア・B・ファジャール
『フルバック』：ハルバード

だった。

「(ど、どうするのは?—)」

「(・・・はあ、落ちつけテスタロッサ、しかしビリしたものが・・・。)」

「(ビのみち変わらねえ、わしがと回じよつとするだけだ。)」

「（やうだね、皆行けー。）」

「まじめー。」

ティアナの戸団で動き出すは六課チーム、皆が向かつは真央のところ

「なるほど・・・一人ずつ倒していくという作戦ですか。」

「まあな。」

「悪いがな。」

「いえ、……でも、」

ゆうぐり手を上に挙げる。

「そちらも覚悟をしてくださいね」

『ゲットセット。』

真央の腕に付いているブレスレットから音がする。

「フレイムアロー……」

そして、衝撃のものを見る……。

「……サウザントシフトー！」

真央のまわりに、炎の矢が現れる……が、

「なんだ？！このバカげた数は！」

……その数、

「……言つたでしょ、1000発（サウザント）ってね。」

皆の顔が蒼くなる、……あんな数の魔力弾避けきれないと。

「……ファイヤ。」

『ファイヤ。』

しかし無情にも打つてきた。

「ちつ！アイゼン！」

『シユワルベフリーゲン！』

「レバンティン！」

『シユランゲバイゼン！』

「バルディッシュ！』

『プラズマランサー！』

「レイジングハート！」

『ディバインバスター！』

なのは達も決死の迎撃に当たる。

ズガガガガガガガガガガツツツツ……！……！……！

「回想終了」

とこり」とで、残つたのが私だけになつたんですよーーー！
・・・ホント、どうしよ・・・。

「ふう、」こんなもので「アホ！！」あいたーーー？！

「相手はコリッター付きだぞー！しかも作戦と全然違つじやねーか！
！」

といつて、ハルバードさんが真央さんを銃の底で殴つた。・・・大
丈夫かな？

ただ、その時でした・・・。

「まあまあ、その辺にしなよ・・・」

アシヒアさんの言葉に、私は驚くいた・・・。

「・・・ジャンゴ艦長。」

第五話「模擬戦？いやいや、嘘めでしょ？」（後書き）

（結局次回予告のみになりました。）

次回「一人の再会」

第六話「二人の再会」 (前書き)

・・・申し訳ござりません。

すごーーーーく遅くなりました！！！！

しかし、これからも遅くなりそうです・・・。

見捨てないでください！

こちらも頑張ります！！

では、どうも！

第六話「一人の再会」

「えつ・・・・。」

その言葉に、私は思い出す。

「あつあ・・・・！」

あの人の事を、

「・・・あぢや〜。」

「ん? ビリした、アシニア。」

「えーとこやー・・・。」 クイクイ

「ん?・・・ああ。」

そして、ハルバードがなのはに近づく。

「なのば。」

「・・・なの。」

「え?」

「本物!・・・ホントにジャングル類なの?」

「・・・」

するビジャンゴは剣に手をかける。

「……いつたい？」

「ふつ、こちのほうがわかるだろ？」

そして、剣を構えこう呟く、

「コミッターレベル1、リリース。」

『コミットリース。』

剣から声がしたと思つと、すくい魔力がジャンゴからあふれてくる。

「真解。」

そして、燃え盛る炎が巻き起こる。

「焼き死くせ！業火火焔龍！」

炎が消えると、そこには・・・

「・・・んじや、あらためて。」

赤眼赤髪で、

「久しぶり・・・。」

龍の形をした大剣を持った・・・

「なのは！」

ジャンゴ・フォーリックスがいた。

「…………」
「えーと……なんか取り残されてるのかかもしれない、私フォイトで
す……。」「うつぐ……。」「シグナム！」

「・・・テスター〇ッサか、やられたのか？」

「えつ、えつと・・・。」

「へ・ビリウした。」

「あー、えつとですね・・・。」

「フヨイト説明中～

「・・・つまり、あのハルバードがあの事件のとき、高町を助けた、
と?」

「うそ、おそれくそうだと「アイツ!」って、ヴィータ?」

いきなりヴィータが叫ぶと、一人のほうに行っちゃった・・・。

「・・・いいのかな?」

「・・・まあ、なにがあるのだらう。」

「・・・はあ・・・。」

ふーむ、何なんに早く知りたかったのはなー。

「ねえ、ジャンゴ君。どうして今まで黙つてたの?」

ん~、少し怒つてるか?

「いや~、実は「お、おこおおえー!」ん?」

あや~、ヴィータも回復したか・・・。

「なつなんでこんなとこにいる?..」

・・・まさか、俺がハルバードだと気づいてない?

「(おもひつかうだよ) あいのこいつは、やつこえぱりせん
とぬつてなかたな。」

「ああ、そうだな。あたしはヴィータだ。よろしく。」

そつ言いながら手を差し出してきたので、握手をしながら、

「俺はジャンゴ・エ・『ハルバード』だ。」

こういった。

・

・

・

・

・

・

・

「え？」

ヴィータは気付いた。

「すっすみませんでしたあ？！」

とりあえず謝った。いや、あたしよりも何倍も偉い人ではあるから
だよ！――

「あつはははははははは――！」

「ヴィータちゃん、聞かれても分からないよ。」

「 う な ん 」

れ て と、

「 え じ ゃ、 説 明 あ る か ？ ？ ？ 」

第六話「二人の再会」（後書き）

次回キャラ設定。

キャラクター設定（前書き）

キャラ設定パート一です！

キャラクター設定

さあ、ようやくここまで来たので、キャラの設定を書いておこうと思いま
した。（ネタバレするかも。）
では、まずはこれから！！

ジャンゴ・F・ハルバード
ジョンゴ・エフ・ハルバード

年齢：19歳

性別：男

外見：「僕らの太陽」の主人公ジャンゴがモデル。まあ、すこし？
大人っぽい。

性格：物事をよく考えるときと、全く考えない時がある。温厚な性
格だが、切れたときは世界が終るらしい。
好きなもの：平凡な時間・甘いもの・雑談・お菓子作り。
嫌いなもの：言うことを聞かない奴ら。

弱点：女性。

戦闘能力

体力：SSS+

魔力：EX

陸戦：SSS+

空戦：SSS+

総合：EX

武器：業火火炎龍（大剣）、天平電龍（砲撃槍）、氷牙水龍（矛）、
森羅万象（大槌）、黒天月光歌（鎌）、聖帝（剣）&ヒト+

まあ、こんなとこかな。

「…なんだこれ。」

おおー、この美術！

いやー、お前の武器、中一全開だなー！

じや「・・・。
(ガチャリ)」

—後は宜しく　by 作者—

「…次行くか…。」

アシェア・ブルカ・ファジヤール

年齢：16歳

外見：「エレメンタル・ジエレイド（蒼の戦記）」の主人公アシェ

アガモテル。（外見のみ）

性格：サックリとしているが、慎重に戦うタイプ。 — エレメンタル

嫌いなものの・キモイ人、思い込みが激しい人

体力：S

魔力：E -

陸戦：SS +

空戦：SSS +

総合：SSS

武器：Gドライバー、と+

ジヤ「俺より三歳年下か～、しかも魔力E -だし。」

ア「そうみたいだね・・・、ふふつ。」

ジヤ「ん? どうした・・・、げ！」

ア「弱点が『女性』って何? あつはつはつはつは。」

まあ、女性に対する抗体がないのよ、この人。

ジヤ「あつーおまえ！」

んじや、アシエアよろしく!

ア「えーと、次は真央だね。」

佐伯 真央

年齢：18歳

性別：女

外見：携帯電話ゲーム『ドキドキダジョン3』の主人公。若干性格が違う。

性格：優しく、おつとりしている。が、戦闘では巧みな槍術と頭脳戦を繰り広げる。

好きなもの……みんなで騒ぐ」と、料理嫌いなもの……仕事

料理

好きなもの……みんなで騒ぐ」と、料理

嫌いなもの……仕事

戦闘能力

体力：S

魔力：SSS+

陸戦：SS

空戦：SS

総合：SSS+

武器：バトルチップローダー、金剛画載（槍）

ジヤ「お前……。」

真「……いや違つたんですよ……。ちよつとその、手先がへつて……。」

ガチャ

真「いつ、いやあああああ――――――！」

ひゅーん

ドーン

ちーん

逝つたな。

ア「……」合掌してゐる。

・・・次。

マリ・ブラット

年齢：18歳

性別：女

外見：『遊戯王』のブラックマジシャンガール+マジシャンズヴァルキリアって感じ。

性格：優柔不断、マイペース、わが道を行く、を信念にしている。
ただ、自己中ではない。

好きなもの：お菓子、昼寝、模擬戦
嫌いなもの：特になし

戦闘能力

体力：SSS+

魔力：SSS-

陸戦：SSS+

空戦：S+

総合：S

武器：マテリアルチエンジャー（ベルト）

マ「私と真央は、『+』『-』ないの〜?！」

何て言うか・・・フェイトの『真・ソニック』的なものがあるよ。

マ「なら、いいや。」

ア「それはそうと、あれはいいの？」

真「あうあ〜〜・・・。」

プスプス

ジャ「まあ、いいでしょ。」

真「お、鬼……。」

ジヤ「黙れ魔王。」

マ「やうこえぼわー、思ったことがあるんだー。」
なに?

マ「魔導師と陸戦部隊の人つて少なくない?」

ア「あー、それは思つた。」

ジヤ「やこじ辺はまじつてんの?」

ちやんと決めてるよ?魔導師は言えなにナビ。

マ「じやあや、陸戦教えてよー。」

陸戦はね、非魔導師で構成されてるから、小隊がたくさんあるの。

ジヤ「つまりはなんだ?その隊の隊長を全部入れるより、司令官と

副官のみにした方が良いと？」

その通り！ちなみに、航空部隊は半分半分、魔導師部隊は一部を除いて魔導師のみで構成されてるよ？

ア「ふうん、じゃあさ、魔導師の隊長人つて最終的に何人になるの？」

真「あいたた・・・、それは私も気になります。」

マ「あつ！よみがえった！」

え「とね、真央たち以外にあと一人増えます。驚くよ？」

マ「わい 楽しみ」

あつ、それに伴い自分独自の解釈が入るので、ご了承ください。

ジヤ「残りのやつは？」

それはまた今度、それでは！

キャラクター設定（後書き）

次回、第七話「質問ターゲット」

第七話「質問タイム」（前書き）

ジャ 「何故こうなった？」

言い訳にしかなりません・・・。

ジャ 「・・・言ってみな。」

部活の大会、学校のテスト、身内の不幸、ウイルス性の大腸炎の順です。

アシエ 「・・・壮大だね。」

そんなわけでここまで遅れました。すみません。

真央 「まあ、ある意味不可抗力なような・・・。」

第七話「質問ターム」

はやて「……どう迷況やこれ?」

なんや呼ばれたハ神です。

スバル「あつハ神部隊長!」

はやて「スバルこれなんなん?」

これってゆうのは、このお菓子の上。

すばる「え~と、親交を深めるためとかで……。」

スバル曰く

なのはちやんとハルバードさんが知り合いでいた それについて説明すると言に出した セつかくなので気になることを言い合わない?となつた 今に至る。

はやて「……なんや、やうこいつとか……。」

ちなみに、このお菓子の上【駄菓子ではなく本格的な方、いわゆるデザートの部類】は真央さんとハルバードさんがつくったそうな。

・す、ぐ、こ、な。

ジャン、「ねお、悪いなハ神いきなり呼んで。」

はやて「ここですよ。あと、私の事ははやてって呼んでください。」

ジャンゴ「やうか、んじや俺の事もジャンゴと呼んでくれ。話し方も普通でいいよ、わざわざ素じやないだろ?」

はやて「えつと、ほなそつをむけむらこます。」

たまにはええやろ。

s.i.d.e ジャンゴ

さて、みんな来たかな?

まあ、ハルバードの中にも知らない奴もいるしなあ~

～説明中～

ジャンゴ「・・・と、言つわけだ。」

ティアナ「そんな事があつたんですね・・・。」

スバル「知らなかつた・・・。」

そらそら、むしろ知つてた方がおかしい。

ジャンゴ「おお、そうだ。この際聞いてみたい事とかあるか? いつ
ていいぞ。」

ほれつほれつヒジヒスチャーしてみた。

スバル「あつ、じゃあなのはさんを助けた時に使つたていう大砲を
見せてください!」

ん?あれか・・・。あれは『大剣』なんだが・・・

? ? ? 『・・・私は、大砲ではないのだが。』

エリオ「うわつ? ! しゃべつた? !」

キヤロ「これつてインテリジェントデバイスなんですか?」

ジャンゴ「ん~・・・正式にはこいつは『クロスデバイス』って言
うんだよ。」

「 「 「クロスデバイス?」」

フォワードがそろつて首を傾げたな。

ジャン＝「まあ、インテリジェンスを足して割つた感じだ。」

はやて「ならその子も人型になるん?」

ジャンゴ「なるよ、クロスアウト《アゴン》」

剣を構えて俺がそういうと、下に魔方陣が発生し剣が形を変える。

？？？「・・・久しぶりですので変な感じがしますね。」

そして、炎のような甲冑を着た、紅の髪と瞳を持つ女性になつた。

ジャンゴーあ、ちなみに他にもあと五人いるぞ。

キヤロ「えっと・・・つまりデバイスを六つも使ってるんですか?」

ジヤン行へ、ああ、井や口もやうてゐるか？」「いろいろ届来るや？」

「お口にいえ！……使いこなせる自信がありません。」

「…主もあまり使わなし者かしるよシな？」

そんなんです。

？？？『そんたそんた！私たいして使われてないぞ！』

？？？』まあ、私はししけどね

？？？』・・・君は、よく使われるからだろ？』

？？？『ふん！・・・別にいいだろうが。』

？？？『あわわわ、皆さん仲良くな？あと、私も使ってくれると・・・いいな。』

・・・今度からみんな使うよ!にしょ。

ジャンゴ「皆出すか・・・クロスアウト《ポセイドン》《バルキリー》《ファラオ》《インドラ》《ゼウス》」

そして皆を出す。 ん?容姿をかけと?・・・次回で書くよ。作者が。

ジャンゴ「んじゅ、とうあえずアゴンかい。」

アゴン「はい、我が名は業火、下名は火焰龍、真名はアゴン、よろしくお願ひします。」

ポセイドン「俺の名は氷牙、下名は水龍、真名はポセイドン、真名は嫌いだから使うな。」

バルキリー「私は天平、下名は電龍、真名はバルキリー、私は真名で呼んでね。」

ファラオ「ええと・・・私は森羅、下名は万象、真名はファラオです・・・よ、よろしくです。」

インドラ「私は黒天、下名は月光歌で真名はインドラだよ。」

ゼウス「自分はキングダム、下名をセイバー、真名はゼウスと言い

ます。以後お見知り置きを。」

・・・よしーみんな啞然となつてゐるー。

ジャンゴ「まあ、ここにいらとも仲良くしてくれ。大抵は人の姿だから。」

side all

ジャンゴ「ほれ、次はないか?」

なのは「・・・それならジャンゴ君達のほかのデバイスって見せてもらつていい?」

ジャンゴ「ん~、いいけどなあ~・・・」

すると、アシニアとマリを見てこいつ言った。

ジャンゴ「こいつらのは、デバイスじゃないんだ。」

スバル「えつ?・・・・・じゃあアシニアさん達もクロスデバイスを?」

アシニア「スバル実はね、私の魔力つてE・なんだよ。」

爆弾を落とした。

全員「・・・え?」

アシエア「だから私クロスデバイスも普通のデバイスも使えないの。」

「じゃあ、どうやって戦うんですか?!」

ティアナの言つことも最もだらう、アシエアはハルバードの航空部隊の隊長なのに「魔法が使えないよ」と言つてゐるようなものなのだから。

はやて「・・・まさか、質量兵器やつたりして。」

はやてがとんでもないことを口走る。

アシエア「いや、さすがにそれはないよ。私が使つてるのは・・・これ!」

はやて「・・・なにこれ?」

アシエアが出したのは、二つのスロットルがついた物だった。

アシエア「これを腰に当てるベルトになつて、このメモリを入れるの。」

そう言つと後ろからメモリを取り出す。それには『イージス』『ガンドム』と、書かれてそれをスロットルに入れた。

『イージスガンダム』

「「「!...」「」」

するとそこには赤い装甲を纏つたアシェアがいた。

アシェア「これが私のデバイス代わりのGドライバーだよ。」
ガンドラム

マツ「ちなみにこれはね、陸戦と航空部隊のメイン装備だよ。」

「さやか・・・おぬぢアーメやな。」

フロイト「ついてゆけない。」

なのさ「あはははは……。」

テイ&キヤ 一・一・一・一・一

スバル - すごい！！

エリオーがこいし！！

アドバイス - あれ? でも重くないですか? 「

アシエア「ふつふつふ、これはね重力操作つていう機能を積んでる
から、服くらいの重さなんだよ。」

キャラ「・・・なんかす」いです。」「

「ナニの口の廻りが、またお出でになつたのですか？」

?

「私は純血の魔女だから、魔法形態も違うの。」
　　マリ　　〔ウイッチ〕

そして、腰のベルトを指差す。

マリ「で、これが私の武装マテリアルドライバーだよ。」

皆が「へ～」となつてると、ティアナが聞いてくる。

ティアナ「そりこえは、魔法形態が違つてどうこいつですか？」

マリ「私たち魔女はね、ミシード式みたいに魔法プログラムを組んで魔法を「作る」って事は出来ないの。こっちの魔法は自然界にもともと存在する魔法を修行や精霊対話とかで身につけるの。」

キヤロ「・・・なんか、大変そうです。」

マリ「まあ、古代ベルカ式みたいに先天資質に頼るんだけどね～。」

ジャン＝」「つまり、この中で魔導師なのは真央だけだな。」

真央「そうですね、まあ私も魔導も魔法も使いますけど。」

はやて「こうこうあるんやな～。」

そして夜は更けていく・・・。

第七話「質問ターム」（後書き）

「ねえ、真央ちゃんのデバイスは？」

ああ、それはまた今度です。

ジャーナル

とりあえず実戦で出そうかと。

真央一近々戦うんですか私？」

・・・たしか後の予定

真央一 そんな・・・

しいしゃなし あなた多芸なギャラだもん（チート的な意味で）

「？」

と、いつこのれからも頑張りま～す。

「……………」

次回「いざ、海鳴へ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7466r/>

魔法少女リリカルなのは～神の化身～

2011年11月17日17時34分発行